横浜いのちの電話

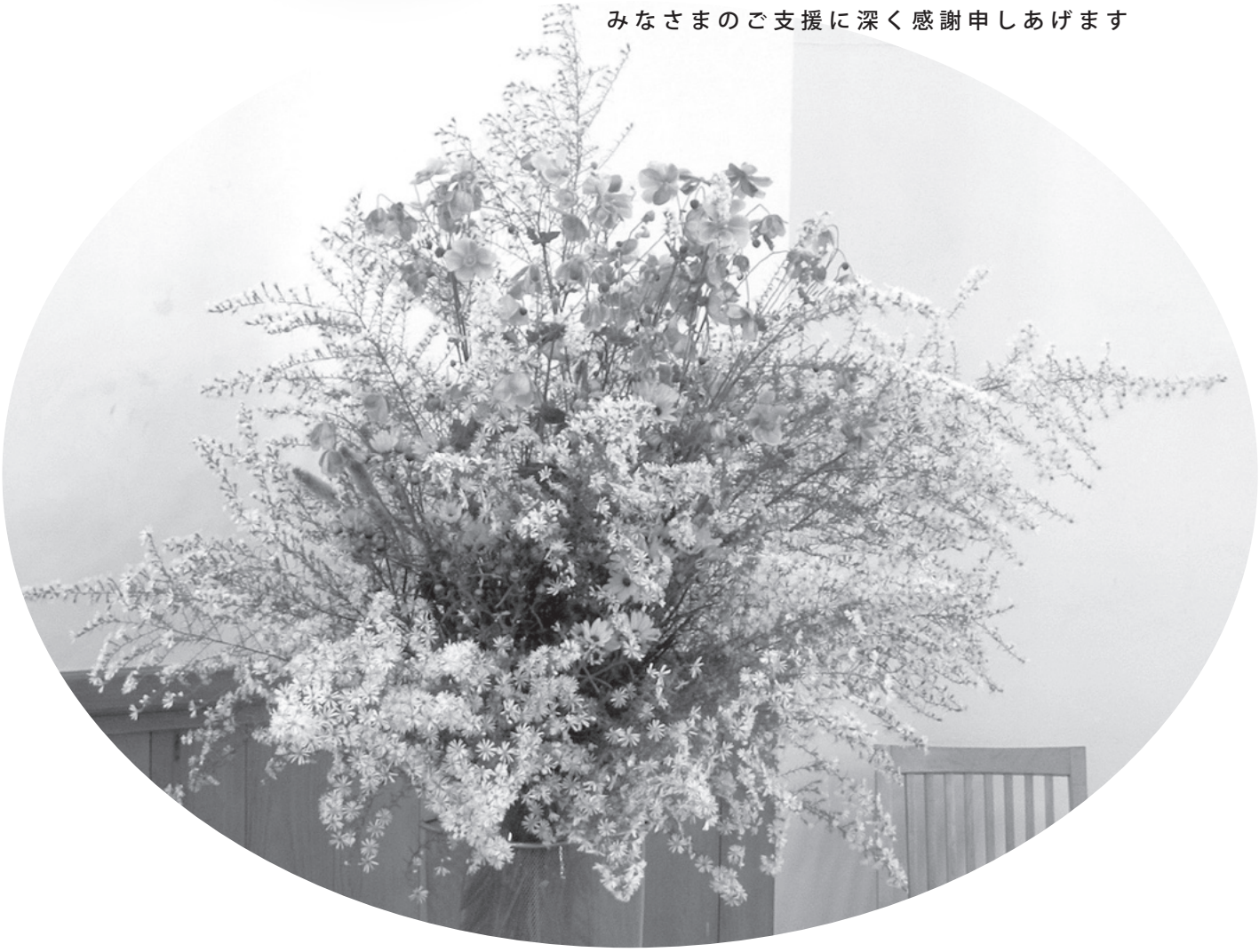
広報80号
2010.11.1

社会福祉法人　横浜いのちの電話
事務局　〒240-8691　日本郵便保土ヶ谷支店私書箱32号　TEL. 045-333-6163
発行人　永野　肇　　横浜いのちの電話広報担当（十川・中野・澤野・堀木）
制作　Visual Communication Design Convivia

Yokohama Inochino Denwa 30th Anniversary

横浜いのちの電話が開局30周年を迎えました

みなさまのご支援に深く感謝申しあげます



ボランティア一同　初心に立ち返り
時代と共に　みなさまと共に
電話を通して対話していきたいと
願っています

横浜いのちの電話 **開局30周年記念講演**

「人はなぜ 自殺するのか」

講師 **樋口和彦** 一般社団法人 日本いのちの電話連盟理事長

都会は見ず知らずの人達が一緒に仕事をして創造的であるけれども、同時に孤独である。そして孤独になるから都会では孤独死すると言われているが、最近の研究では家族や縁者のある家庭の人のほうがかえって危ない。家族の崩壊、家族の蝕まれ方が、おそらく我々の想像よりもっと早く進んでいる。都市の生活を守っていくためには、社会の絆を結びつける匿名のボランティアによる電話相談が極めて有用だ。個人のストーリーに耳を傾け、ストーリーを見いだしていくのが、いのちの電話の大切な役割ではないだろうか。

●2010年9月4日(土)／ロイヤルホールヨコハマ

ご紹介に預かりました樋口でございます。1927年、私は鶴見で生まれました。今83歳であります。ですから空襲の時も横浜空襲を知っておりますし、横浜市歌というのも知っておりまして、大変親しい気持ちで参りました。今日は「人はなんで自殺するのか」という題をつけましたけれども、実は私自身もですね、京都いのちの電話を27年前に三人で言いだしっぺで始めました。で、私自身もこのボランティア運動に関わってまいりまして、その初期の人達の苦労をよく存じておるつもりでございます。で、私自身のボランティア運動の係わりとしての自殺の予防、この問題ということを私の体験からお話してみたいと思います。

動物は自殺しない

人はなぜ自殺するかっていうと、まあ答えははっきりしているんです。実はわからないんです。猫は自殺せんのです。お宅の猫で悩んで自殺した猫ありますか？相当ひどい仕打ちを受けても口惜しいから自殺する猫はいない。化けることはあるんですけれども、自殺することはない。ということは動物には本能というのがありまして、本能的にいのちを守るっていうことは、動物としての原則であります。ですからもし人間が動物であるならば、絶対に自殺はしないわけです。ですから動物的な人はですね、だいたいほっといても自殺せんのです。悪いことはしますけど、自殺はしないんですね。本当にまじめな人間らしい方の問題である。だから我々はこの問題についていのちは大切であるし、こういう方の尊いいのちを一人でも助けなければならない、ということで、我々はこういうボランティアをはじめてきたっていうことだと私は思います。

社会の絆をアメリカのボランティア活動で学ぶ

さきほどのご挨拶の中でも申し上げましたが、私は本当に日本ではボランティア運動っていうのは、発達しないんじゃないかと思ったんです。それは1960年代に私はこの横浜の四号岸壁というのが昔ありまして、そこから外国のフルブライトの留学生が皆乗っていくんですね。私もそこからテープで送られて遣唐使みたいな気持ちで行ったつもりがあります。だんだんに港が遠くなって、またあのテープというのがよろしいんですよね。あの五色のテープですね、だんだん絆が切れていくあの心細さ、学ならずば帰るべからず、というような遣唐使みたいな気持ちで、見当違いなこと考えながら（笑）行ってたわけですけれども、その時私は病院でいろいろ研修を受けました。大学院でも受けましたけれども、専ら病院です。私立病院、それからマサチューセッツの州立病院、何をやっているかと言いますと、いろんなこと勉強するんですけど、しかし本当に勉強したのはですね、病院の中にたくさんいらっしゃるボランティアの方たちの関わりなんですね。患者さん達が社会に復帰する時に、どんな問題に直面するかっていうことを、まず社会でもない家庭でもない、そこで間違いを犯しても皆がちゃんと直してくれる、そういう擬似社会みたいなものを作って、まずそこで勉強してから国家に帰る。そのためには社会の人が病院の中に来て、さまざまなプロジェクトをやってく

ださっているわけですね。私もそこに参加しましたが、どの人が先生なのか、どの人が患者さんなのか、分からんのですよ。私は私のスーパーバイザーに聞いたんですよ。そしたら鍵を持っている人が医療側、持ってない人がたまたま患者さんなんだ。頭の差とかそんなんでは全然ないんですね。事実、お医者さんでも病気になって、そこに入院されている方がありますから…。だからそのお医者さんがあちこち診察して回ったりなんかして、おかしいな、あの病棟、お医者さんが随分いるなあ、とそういうことになって、ちょっとそこに入っていると、なんか頭が少しおかしくなるような感じになります。けれども反対にそこの中で本当に人間と人間のそうですね、美しい味わいを経験してですね、あー、なるほどこれがボランティアかと。社会を作っていくというのはこういう絆の原則というのをこういうところで学んで、エネルギーと時間の余裕のある人はここに来て、そしてまた自分が今度病気になったときには、またそういうところに行く。お互いにそこで助け合いながら作っていくのが市民社会ではないかと心から体験したんですね。

ハロウィンデーは遊びながら絆を作る実験場

そこでひとつ面白い話があるんです。ハロウィンデーというのがあるんですが、皆さんご存知ですかね。かぼちゃをくり抜いておばけをつくるんですけどね。そしてとくにマサチューセッツはそれが盛んでしたねその頃は。実は私アメリカから帰ってきたばかりなんです。昨日の夜帰ってきまして、本日の講演に出なければ、どうしても恩義がありますから、予定を合わせてですね、プロビデンスからシカゴに飛んで、シカゴから成田へ飛んで、本当は関空に帰る予定でしたが、こちらに泊まりまして今日参った次第です。で、ですからマサチューセッツの州立病院も久しぶりに見てきました。当時は何千人単位の非常に近代的な病院でした。ですから無数のボランティア団体が入ってやっていたんです。懐かしいところを訪ねてきましたんですけど、その頃私は留学生で日本から行ったばかりでハロウィンなんて何するのかも知らないんですね。するとそうやってオルガナイズする患者さんの代表の方が来て、明日はハロウィンデーにあなたは参加するか？って聞かれるんですね、私は知りませんから、ハロウィンデーって何をするのかと聞きましたら、ここにいる患者さんも先生も皆クレイジーになるんですって。私ビックリしましてね、患者さんにそんなこと言われて、どうなってんのかなここは…と思いました。皆自分で装束を作りまして、いろいろおもしろい。また仮面ですからその仮面で、その人の普段出せない性格が出てくるんですね。だから普段相当暴れる方もそういう時は、大人しくなるということで、いろいろ違った面が見られておもしろいんですね、それでそういうものを取り入れているんですね。そうやって社会に出たらば、こういう人達がどういう困難に出会うだろうか、ということを前もってそれを経験する、その実験台になる市民の代表として、皆さんがそこに来ていらっしゃる、ということです。

日本にもあったボランティアの素地

なるほど、市民社会っていうのはそういう形で、持ちつ持たれつやっていくんだなあ、と思って日本へ帰ってまいりました。私は特に亡くなっていく方ですね、癌などで余命いくばくもない方達の面接をして、そういう方達のためにどういうことができるか、ということの特別な訓練、そういうことも非常にめずらしかったんですけれども、それを受けて帰ってきました。そういうことがいかに日本で必要かってことを痛切に感じてですね、帰ってきたわけです。

そしてこのいのちの電話の運動にも携わったわけですね。ところがですね、初めは確かに困難ではありました。そして今振り返ってみると、日本人もやっぱりどっこいたいしたもんだ…、と私は今思っております。と申しますのも皆さんご承知のように、阪神淡路の大震災の時にあれだけの人間がですね、多少混乱はあったんですけど、皆来て被災者を訪ねた、他の国では、どこの国とは言えませんが、ああいう災害があるとき、一番困るのは、略奪があったり、そして悲しみの上に、尚悲しみを加えてしまうような行為が起こってくるって事が普通なんですね。反対に日本ではそうではなくて、そこへ出かけて行って焚き火をし、水を汲み、そして一緒に語り合う、そういうボランティアが自然に湧いてきたということです。これは日本人もやればできるんだということを思いました。

心の専門家にも防ぎきれないことがある

横浜いのちの電話が30年と言うことですね。最初のうちは確かに私も思っていました。素人が話をするくらいのことで、自殺を防げるだろうか…、心の専門家といわれるそういう医療に携わっている精神科の先生、カウンセラーの方、臨床心理士の方でも、自分がずーっと会っている、私もそういう体験があります、何年も会っている人に自殺をされてしまうっていう体験、ある意味ではですね本当にそういう体験を経て、立派なお医者さんが出来上がってくるんではないかというふうに思います。まあ、死んでいく人も大変でしょうけど、死なれてしまうお医者さんとか、そういう人の嘆き、もう自分は二度としたくない、廃業するとか、そういうところまで追いつめられます。それはなぜかって言うと、なんでこれだけずーっと何年にもわたってなんでも語り合ってきた仲なのに、なんで自分に何にも言わずにそっと死んでしまったのかということです。ここは人間の大変不思議なところです。なんでも言える間柄の人だったら、本当はなんでも言えるはずなんですけれども、なんでも言える親しい間柄だからこそ、やっぱりそのことは言えなかったということですね。

自死遺族の言えない苦しみ

今、自死遺族の方々の会が出来上がってきて、この横浜いのちの電話の方々もおやりになっていると思うんですけど、やっとカミングアウト出来るようになって来た。そういう人達が一様に言うのはですね、交通遺児の方々はそれはお父さんお母さんを事故で亡くされたから、非常に悲しいけど。この方々はこの悲しみの上に自分のお父さんお母さんが自殺で死んだということを言えない、長年に渡って言えないってことですね。これは大変な苦しみだというふうに思います。そういう方が今、口をだんだんに開かれてきておりますけれども、そういう方の言葉の中にですね、小学校の５年生くらいの男の子がなんでお父さんの２階の部屋に行って、もう１時間早く自分は行っていたら、お父さんは首を攣らなくて良かったんじゃないか・・それが口惜しい、それが自分の心残りだ、と言っているのを聞きました。だけど良く考えてみたら、小学校の５年や６年の子供がお父さんが部屋で自殺するんじゃないかって、心配で毎時間毎時間２階に上がって行くわけないじゃないですか、そうでしょう。それは実際には不可能なことです。実際には不可能だけれども、自分の愛する者を亡くしてしまった人達は、あの時なんで自分はそのことができなかったのだろうか…もっと愛してあげたら良かった、もっとあの時ああしてあげればよかった、そういう悔いというものが残るんですね。その悔いが今度嘆きになって、その人を捕まえてしまって、その人を動けなくしてしまう。死っていうのはですね、その人を掴んで離さないという力があるんです。思いつめて、それ以外を滅ぼしてしまう、そういう力があります。故人ばかりじゃなくて、その亡くなられた人を失ってしまった人達全体を今も死が支配しているということがあります。

人間はひとりぼっちになるってことが非常に危険

したがって自殺予防と言いますけれども、本当にいのちの電話でそういうケースもないことはありません。ですがごく少ないわけです。今服毒していのちの電話にかけてきて、そしてなんらかの手立てで助かった…これ私の人生でひとつ知っておりますけれども、これはごく稀です。そうではなくて自分が悩みをもっていて、だんだんそれが深くなって、なんで自分はそういうふうになっていったのか知らないという…そういうふうな中で亡くなっていくということです。でこれはですね、人間はひとりぼっちになるってことは、非常に危険なことなんです。横浜も、近代都市の代表的なところです。私は鶴見に住んでいましたが、当時私が生まれた頃は、第一京浜工業地帯と言いました。日本の近代産業のまず発達した所であり、東京と横浜の間の臨海工業地帯であります。そこに全国の人達が流れ込んできていたのです。今さきほど副知事さんがおっしゃっていましたけれども、今も大量の人達が流れ込んできています。

都会の魅力と農村

それではなぜ農村から流れ込んでくるか、私の父も佐賀から来たんですけど、ですから皆さんの１世代、２世代前をさかのぼったら、皆そういう方だろうというふうに思う。それは大都会には大都会にしかないひとつの特徴というのがあるわけです。それは創造的な力なんです。人間と人間と寄り集まって、そこで知恵を働かせて工業を興してですね、非常に個人では持ち得ないようなそういう力を持つわけです。だからそしてまた一箇所で失敗をしても、二回三回と生き返る、変わるチャンスというものがあるわけです。鶴見でだめなら川崎に行く、川崎でだめなら緑区に行くとかね、そうするともう誰もわからない。

反対に農村社会は安定してよろしいんですけれど、しかし噂であるとかそういうものに縛られて、創造の機会というものがないということであります。ですからよく世話をしている方が、なんで親戚の方に相談しないのかというふうに言いますと、いや親戚の人も近くにいるけれども、そういう人に相談するとかえって危ない、という声があるくらいですし、皆さん農村出の方があったらご存知ですね。農村っていかに美しいところであるか、確かに美しい面はありますけれども、反対にいかに醜い面があるか、一旦烙印を押されてしまうと、ああ、あの人はもう出戻り、出戻りって言葉で、もうこの人は結婚のけの字がなくなってしまう。運命的なそういう社会なんですね。

創造的であるけれども同時に孤独である社会

それがこういう見ず知らずの人達、お互いに知らないけど、一緒に仕事をしていく、こういう近代社会の中でこの仕事をする。で今言いましたが、創造的であるけれども、同時に孤独である。壁ひとつ向こう側の人は、どういう人か全然知らないということです。最近100歳の方が実は亡くなっていて、それも何年も分からないとか。そして調べてみたら、大方一人ではなくて全国にたくさんいるというようなことですね。我々の美しい家族社会っていうのは、いつのまにか崩壊してた。もしかしたら我々の世界で一番高齢者の統計というものがですね、統計学者はそういうことはないと別の見方をするから、それで全然ゆがむことはないと言ってますけれども、もしかしたら統計の基礎数字すらもゆらぐのではないだろうか。こんなことはおこり得ないと我々は思っていたわけです。百歳の人になったら、やはり近所の人も知ってますし、皆お布団上げたり、皆でお祝いするから良かった良かったって言うことになるはずなんですけれども。

すすむ家族の崩壊が危ない状況を作り出す

そして孤独になるから、都会では孤独死する、と言われていますけれども、最近の研究ではですね、子供さんがいたり、兄妹がいたり、縁者のある家庭の人のほうがかえって危ないと言うことですね。で、高齢になってくると、やは

り経済問題やら年金問題とかいろいろあります。また年寄りになってくると私もよくわかりますけれど、依怙地になりますよね。子供の言うことは聞かない。わしが勝手に自分で生きてきたんやと、戦争からずーっと生きてきて、おまえら何を言うか、俺はそんなこというなら知らん、と言って国定忠治みたいに出て行ってしまう。それからどこに行ったかわからない。今生きていれば115歳になっているだろう…ということですね。だから必ずしも親類縁者があったら兄妹があったらいい、子供があったらいい、ということではない。ここの家族の崩壊、家族の蝕まれ方というのが、まだ十分リサーチが済んでいませんけれども、おそらく我々が想像しているよりもっと早く進むということです。そこで後で言います、この社会のネットワークというものが必要なんです。孤独になったときに誰が面倒見てくれるのか、反対にそれに頼りすぎてもいけませんけれども、まったくそれがない社会、それは人間が住める社会でしょうか。

昔の電話は経済優先、個人情報が筒抜けだった

電話というものが発明されたのが、20世紀、皆さんご承知のようにグラハムベルが発明したんですが、最初はこの電話って言うのは経済的なものしか使用されていなかったです。だから中華そば屋さんが出前で電話とってですね、そういうような形ですね。あとはお金持ちとかそういう人です。昔、電話はそれぞれの家にはなくてですね、だいたい「呼び出し」って言ったんですよ。年寄は皆良く知っていると思いますね。そんな皆電話なんてなかなか引けない。だいたいそんな回線がありませんからね。そうすると、お医者さんの家とか料理屋さんとか、旅館だとかそういうところに電話室があって、こんな大きな板が打ち付けてあって、性能が悪いから大きい声でしゃべらなきゃいけないと思うから、大声でわーわーわっていうんですよ。九州からかかってきたら九州まで届くような声でしなきゃいけないと思って、わー言うんですね。「えーどうしたの？お父さんが死んだの？死なないの？」とか言って、近所にわーっと知られてしまうんですね。電話を持っているお宅は、自分の電話であると同時に、近所の呼び出し電話でもある。だから名刺に「何番（呼）」って書いてあるんです。」「呼び」っていうのは自分がもっているんじゃないの、万一のときはここにかけてくださいよ、という。だから電話をもっている人は近所に住んでいる人に対しても責任があって、すぐ下駄つっかけて「電話よ、電話よ」って飛んでくるんです。そうすると「死んだの、死なないの」っていうんで、すぐにばれてしまうというようなことになるんですね。

電話を経済の道具から絆をつくる道具へ

ところが最近は携帯電話ですよね。だから最近は子供さん一人ひとりが携帯電話をもっている。そういう時代です。この電話の線が経済に使われるだけではなくて、人の心というものを結びつけることができないだろうか、ということです。京都のいのちの電話は実は、電電公社、昔電電公社って言ったんですね。電話会社の交換機があったところを我々はお借りしたんです。で実は労働組合の人と、それから上の人と話しましてですね、電話会社はここからお金儲けているわけですよ。我々は知っているわけですよ。回線があればいくらむこうが儲かっているか、昔は一社しかありませんから、必ずもう。脅迫しているわけではないけど、その一部をこの尊い事業のために貸してくれてもいいんじゃないか、返してくれてもいいんじゃないか、というふうに思ったわけです。そしてお話しましたら、そこをお借りして、もちろんお金払ってますよ、だけど完全に払わない、ちょっとだけ払ってですね、ていうことは、電話は商業、工業のためだけではなくて、日本のこういう福祉社会のために電電公社とあろうものが、やはり働くべきだという主張があって、あまり強くは言いませんけれども、どうぞ出してくださいよ、というあれでやっているわけですね。ていうことは、この近代都市を守っていくというためには、どうしても近代社会で発明された電話という線を使って、人と人との心を繋げる、しかも誰々さんということを名乗らないで、匿名で、ここでもそうですね、「横浜いのちの電話です」と、とって「私山田です」とか、「神崎です」、とかそんなことは言わない。個人で言いますと、その個人が呼び出されて迷惑がかかりますから、匿名でとる。そして今度かける方も自分の名前を名乗らなくても自分が困ったときに、一番近くにある電話、おそばやさんにかけるのと同じように「これどうしたらいいか」ってことでかけられる。そうするといのちの電話にかければですね、親切に話を聞いてくれて、応えてくれる。でこれは社会の中に生きる一人ひとりが心の絆を結びつけて、そして仕事をする、これがボランティアの基本的な考えだと思います。

ボランティアが社会の絆をつくり再生させる

アメリカの社会っていうのはですね、このボランティアで成り立っているんですよね。ですからわりあいアバウトなんですよ。アバウトで倒れそうだけれども、結構倒れない。だいたい人間は、ひとりぼっちでストーリーがなくなった時、危ないんです。ところが自分の問題は解決しなくても、自分の行くべき道、人生のストーリーが見えたときには、辛くてもやっていこうと思う。それは自分が語ることによって、自分のストーリーが見えてきた、それを自分で捕まえることができたということだと思います。

そういう意味でいのちの電話は、いろんなところで、いろんな人のストーリーを聴いてあげ、そして作りあげているのではないか、そんなふうに思うのであります。まだまだ話したいことがありますけれども、このへんでやめさせていただいて、私の責任を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございます。

インフォメーション

【日誌　20010.5～2011.4】

2010 年

5/01　相談員委員会
10　フリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」
10　「広報 79 号」発送
10　内部監査
11　30 周年実行委員会
13　相談関連部会
13　理事連絡会
15　研修担当者養成委員会
17　理事会・評議員会
21-23　養成研修 (合宿)
28　全体研修会・研修担当者会

6/02　事務局会議
03　相談関連部会
05　相談員委員会
10　フリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」
12　30 周年記念誌座談会
15　30 周年実行委員会

7/03　相談関連部会
06　相談員委員会・新年会
08　フリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」
09　神奈川自殺対策会議部会
10　理事連絡会
13　公開講演会（窪島誠一郎氏）
15-16　心理相談と一般相談との交流会
16　事業報告発送
21　第 1 回全体研修会・事業報告説明会
23　かながわ自殺対策会議
24　第 1 回全体研修会・事業報告説明会
29　連盟関東ブロックセンター代表者会

8/05　相談関連部会
10　ﾌﾘｰﾀﾞｲﾔﾙ「自殺予防いのちの電話」
11　30 周年記念事業準備委員会
13　事務局会議
27　外国語相談検討会議

9/01　バースデーラインを担おう会・開局 30 周年
04　相談員委員会
04　30 周年記念式・祝賀パーティ
10　フリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」
10　横浜駅街頭キャンペーン
11-12　自殺予防シンポジュウム (東京・川崎)
11　相談関連部会
25　30 周年記念講演会 (西岡徳馬氏)
30-02　相談員全国研修仙台大会

10/04　広報部会
05　公開講座・相談員全体研修（河西千秋氏）
07　相談関連部会
10　フリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」
14　公開講座（山口和浩氏）
22　公開講座（古野拓氏）
22　秋のコンサート（出演：伊東恵里＆小椋佳）
25　公開講座（桑原寛氏）

編集後記　今回から広報のお手伝いをさせていただくことになりました。よろしくお願いします。先の30周年記念式典に参加した折、いろいろな先輩方にお目にかかる機会を得ました。そんな先輩方を初め、さまざまな方面から御支援くださる方がいらして、今の私達の活動の場があるのだと再認識させられました。今ここにいられることに感謝し、大切にしていきたいと思いました。I・S

クリスマス・歳末募金のお願い

目標 300 万円

昨年は 2,186,436 円の募金がありました。皆様のご協力に感謝いたします。今年度もよろしくお願いいたします。ご寄付は税法上の優遇措置の対象となり、法人は損金算入、個人は寄付金控除が受けられます。

●振込先
郵便振替　00240-3-15191
社会福祉法人 横浜いのちの電話
（振り込み手数料は無料です）

社会福祉法人横浜いのちの電話

2011 年度 電話相談ボランティア募集

かけがえのない生命を尊重し
対話する電話相談ボランティアです。
あなたも参加しませんか!!

電話相談ボランティアは、1 年間の養成研修修了後、電話相談員として認定されます。

【応募資格】　年齢 **23** 歳から **65** 歳まで（2011 年 3 月 31 日現在）
【応募期間】　2010 年 12 月 1 日（水）～ 2011 年 2 月 5 日（土）
【募集人数】　**40** 名
【研修期間】　2011 年 4 月～ 2012 年 3 月
【研修受講料】　7 万円（3 回分割納入）
【応募方法】　**90** 円切手を同封の上、事務局へ「募集要項」をご請求ください。
●ホームページでも入手できます。
http://www.yind.jp/

〒 240-8691
日本郵便保土ヶ谷支店　私書箱 32 号

公開講演会

2009年度　自殺予防のための厚生労働省補助事業　公開講演会

「希死念慮への対応」

講師　張 賢 徳氏
（帝京大学溝口病院精神神経科教授）

日時：　2011年1月28日(金)　19時～
場所：　横浜市神奈川区民文化センター かなっくホール
参加費：　無料　　定員：300名
受付は11月22日(月)から電話にて事務局まで

横浜いのちの電話 事務局
☎ 045-333-6163（月～金 9 時～ 17 時）

神奈川県共同募金会からの配分金

平成 22 年度は、30 周年記念講演会「生かされて生きる」(講師：西岡徳馬氏) を開催しました。

毎月 10 日は フリーダイヤル

0120-738-556（こころ）

毎月 **10** 日 8:00 ～翌日 8:00　24 時間・無料です
あなたがつらいとき、近くにいます。ひとりで悩まないで、こころの苦しみをお話し下さい。
自殺予防　いのちの電話です

横浜いのちの電話　春の映画会

オーケストラ！

●日時　2011 年 **3** 月 **10** 日（木）
●会場　関内ホール（大）全席自由
●前売券　￥1,000 / 当日券￥1,200
お申込み・お問合せ　☎ 045-333-6163

モーツアルト、チャイコフスキーの名曲に乗せて贈る寄せ集めオーケストラが巻き起こした、ある奇跡の物語

ロシア・ボリショイ交響楽団で劇場清掃員として働く、さえない中年男アンドレ。そんな彼だが、かつては栄えあるボリショイオーケストラで主席をつとめた天才指揮者だった。共産主義時代、“ユダヤ主義者と人民の敵”と称されたユダヤ系の演奏家たち全員の排斥を拒絶し、名声の絶頂期に解雇されたのだ。そんなある日、清掃中にアンドレは、1枚のＦＡＸを目にする。

ひとりぼっちで悩まずに…

だれかと話したいとき　こころ寂しいとき

横浜いのちの電話相談

045-335-4343（24 時間体制）
●ファクス相談（聴覚言語障害者のための）　045-332-5673
●エイズ相談　045-335-4343

外国語電話相談

●ポルトガル語　045-336-2488
●スペイン語　045-336-2477
●情報サービス　045-335-0092
（ポルトガル語・スペイン語・タガログ語による）